

⑤ 幅広い国際交流

1

国際交流

■国際性を求める背景

横浜のまちに「外国」をもたらしたのは、二つの歴史的なできごとであった。いうまでもなく、一つは開港（一八五九年）であり、もう一つは第二次大戦後の接収である。横浜にとって、開港はその後の近代都市としての発展につながる幸運となり、接収は戦後の都市の復興を阻む不幸となった。しかし、この二つのできごとは、いずれも当時の横浜の人たちの意思とはかかわりなく訪れた点では共通している。そして今、横浜は、「よこはま21世紀プラン」を掲げて、今度は自らの意思で国際性豊かな都市をめざそうとしている。



国際親善をねらいに、56年から「国際ひなまつり」が開催されている

横浜が改めて国際性を求めようとする背景の一つには、横浜の特色とされてきた国際都市としての性格が過去に比べ弱まっているという認識がある。また、オイルショックや最近の貿易摩擦を契機に、市民生活が国際社会の動向と深いかわりがあることを、身をもって知らされたからでもある。

横浜がもつ国際性の条件は、確かに低下しているといえる。かつて世界への玄関口

であった横浜港が、航空機輸送の比重が増大することによって、その国際的機能を弱くした。これに伴い、外国企業や外国人観光客も減少し、横浜で外国との通商に活動していた外国人社会も衰退した。また、外交、国際貿易、国際情報などの機能が東京に圧倒的に集積し、一方で横浜は東京のベツドタウン的色彩を強めていった。

しかし、過去に対する郷愁ではなく、これからの国際性をどう考えるかが重要である。過去の蓄積は正しく評価し、今日的な条件のもとで生かすことによって、新しい国際性を模索すべきであろう。

■都市間の相互理解が基盤

ここで、横浜のこの四年間の国際交流を振り返ってみよう。この四年間には、従来からの姉妹・友好都市との親善交流（図1）や貿易振興のための見本市に加えて、新しい国際交流の動きがいくつか生まれた。分野でいうと経済交流やポート（港）・セールスの活動。地域でいうとアジア太平洋地域との交流、とりわけ上海市との交流が活発化したといえる。また、発展途上国

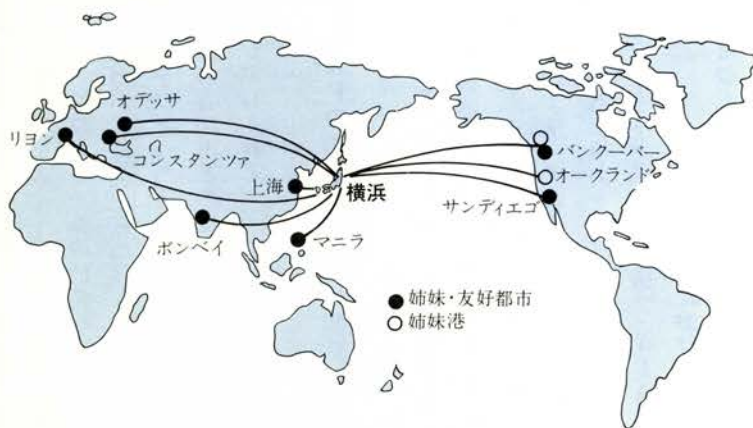


「上海工芸品展覧会」会場、産貿センターには25万人が足を運んだ

の開発に対する協力もその一つである。経済交流やポルト・セールスは基本的に実益を目的とするものといえるだろう。そして多くの場合、経済のまえに文化・スポーツ交流が行われている。つまり、都市間の国際交流の場合には、それぞれの相互理解が交流の基盤として必要なのである。

その意味で、昭和四八年に友好都市提携を結んだ上海市との幅広い相互交流は、良い事例である。横浜・上海両都市の交流拡大のきっかけとなったのは、五四年一〇月に上海で開催された「一九七九年日本横浜工業展覧会」である。地方自治体として初めて中国で展覧会を開催した。しかも、日

図-1 横浜の姉妹・友好都市、姉妹港



中平和友好条約が締結されて、日本全体が中国ブームのさなかであった。翌年、今度は横浜で「一九八〇年中国上海工芸品展覧会」が開かれた。五六年には曲芸パンダ(ウェイウェイ)が来浜して、子どもたちの人気をさらった。



「横浜・上海友好交流促進会議」調印式

上海での横浜工業展の準備段階で、両市の代表による度重なる協議が行われた。そのなかで、経済交流から文化交流にわたる幅広い項目について話し合い、合意していくために「横浜・上海友好交流促進会議」を置くことになった。この会議は五五、五六、五七年と三回にわたって開催され、両市間の交流の基礎をつくった。第三回の会

議では、「両市の交流は、友好協力・平等互恵の原則に基づいて行う」、「とくに経済・技術分野については、相互の実利を重視する」ことを改めて確認している。交流項目は一五にわたり、そのなかには、上海からの技術研修生の受け入れ、横浜から中国鍼灸（しんきゅう）研修生派遣、小・中学校生徒の作品交換、ジュニア・スポーツ交流、

良種野菜の種子交換などが含まれ、幅の広いものである。

このような横浜・上海の活発な交流は、両市の強い熱意に支えられたものである。この交流をひとつの典型として、今後環太平洋諸国の各都市との交流へと拡大していくことが期待される。

■ Y L A P の開催も

このような多面的交流に取り組むため、五六年に横浜市海外交流協会が設立された。また、五七年六月には、横浜市が国連との共催により、アジア太平洋地域の都市間の相互理解と協力を促進するねらいで、「国連アジア太平洋都市会議」（Y L A P 正式名称「アジア太平洋地域における自治体の都市づくりに関する横浜国際会議」）が開催された。五七年のビッグ・イベントとなったこの会議について、少しくわしくふれよう。

会議にはアジア太平洋地域の一五都市の代表を含め、海外から二八か国一一七人が参加した。そして、アジア太平洋の都市の人間居住環境の改善と、そのために地方自



57年のビッグ・イベントとなったYLAP

治体が果たすべき役割が論じられた。会議の大きな成果のひとつに「横浜宣言」がある。諸都市間の相互理解と協力を促進し、人間居住の問題解決を図ることを通して、世界平和の創造に自治体と市民が貢献して

いくこと、戦争による破壊に費やされている資源を人間居住の将来のために振り向けるべきであるという主張が、宣言として採択された。そして、横浜が、国際平和に貢献したいという意思と、発展途上国を含む

近隣のアジア太平洋地域に対する関心とを、広く世界に伝える機会となった。

この会議の開催に先立って、市民のアジアに対する理解と関心を深めることをねらいとした各種の文化的行事が行われた。「アジアの生活と文化」および「アジアの都市と市民生活」と題する講演シリーズ、中学三年の女生徒と主婦が最優秀賞を得た市民作文コンテスト「わたしの中のアジアと日本」などがそれである。会議開催期間中にも「アジアの夕べ」（伝統音楽と舞踊）や「アジア太平洋地域の都市と人びと」（パネル写真とフィルムによる紹介）が催され、多くの市民の関心を呼んだ。とくに、アジア太平洋諸国などの海外や国内各地からの会議参加者と市民とが意見交流を行った「市民フォーラム」では、アジアの都市の貧困の問題、日本の都市が発展によって失ったものは何か、などをめぐって活発な議論がくり広げられた。参加した多数の市民にとって、アジアを通して自らを問い直す貴重な国際交流体験となったようだ。参加した一人の主婦は、「近隣のことからアジアの問題まで心向けながら生活しようと思う」と意見を述べた。